

父母への報恩

こうして俗世間的にみると親不孝といわれても仕方が無く、少なくとも孝行息子とは言い難い空海だが、実は大きな形で父母への報恩をしている。

空海が唐から帰って来てから故郷に寺を建てたという事を先にみたが、それが現在、香川県にある善通寺（ぜんつうじ）というお寺である。四国八十八ヶ所霊場の75番札所で、空海はこの地で生まれたと言われている。

この善通寺というお寺は空海の父、佐伯直田公から土地の寄進を受け、807（大同二）年臘月（陰暦12月）朔日に建立に着手、813（弘仁4）年6月15日に落成したという。建設を始めた807年は空海が唐より帰国した翌年にあたり、また、寺の形は、密教の師にあたる恵果阿闍梨が住居としていた長安の青龍寺を模して造られたと言われており、空海の意向が強く反映されている事がうかがわれる。

寺名である善通寺であるが、実はこれは父親の名前からつけられている。父、佐伯直田公は諱を善通（よしみち）といい、そこから寺の名前を善通寺と号したというのだ。自分の生まれた土地に建てられたお寺の、落慶という完成披露を、自分の誕生日の6月15日に行い、父親の名前を寺の名前とすることによって、この世に生を与えてくれた父親に対する謝意を顕そうとしたのだろう。

一方、母親に対しての報恩はどうであったか。

和歌山県高野山の麓に慈尊院というお寺がある。816（弘仁七）年、高野山開創に際し、その表玄関として、高野山一山の庶務を司る政所（寺務所）と呼ばれる施設を置き、高野山への宿、冬期の避寒修行の場等として伽藍を創り、それが慈尊院となったと言われている。

その後、我が子、真魚（後の空海）に会いたい、その開いた高野山をひと目みたい、と四国讃岐より紀国（現在の和歌山県）の高野山の麓まで、空海の母

親が訪ねて来たが、当時の高野山は女人禁制（女性に対し、社寺などへの立ち入りを禁ずるしきたり。その理由としては女性の血の忌みあげられたりするが、高野山の場合、僧侶が修行に専念出来なくなるのを避ける為だと私は聞いている。尚、この禁制は1904明治34年に解禁となっている。）母は山上の息子の元に行くことが出来ず、この慈尊院に滞在し、そこから山上の息子を憶っていたという。

高野山町石道は、麓から高野山に至る道で、この慈尊院から山上の高野山入口の大門を経て、奥の院に至る20数キロに及ぶ山道も七つの町石道のひとつだが、空海は月に9度は山を下って、麓の慈尊院にいる母親を訪ねていたと言われ、寺がある土地の地名“九度山”はそこから付けられたと言われう。

また、この町石道には押上石（おしあげいし）という巨石がある。これは我が子、真魚に会いたいと結界を超え入山しようとした母親を激しい雷雨が襲った時に、空海は母親を守る為にこの石を持ち上げてその下に匿って守ったと言われう。そういった空海の孝心を伝える説話のある石なのだ。

善通寺、と言う父親の名を冠した寺は1200年後の現在もその名を伝え、母に対する孝行は、その滞在地であった慈尊院のある九度山の名からも偲ばれる。

若いときから独立独歩で自分の思うままに生きて来た空海。だが、父母それぞれに対し、大きな報恩の孝行をしていたのだ。

当時の社会道德の規範でもあった儒教の観点からしても、空海は親孝行であったと言える。『孝経』によると

わたしの身体は、両手両足から髪の毛、皮膚の隅々に至るまで、これは父親と母親から授かったものである。それを意味なく損なったり傷つけたりしないようにするのが、孝行のはじめなのだ。立派な人物になり、正しい道を実践し、名前を後世に残して、その親は誰だとその父母の名

前を世に知らしめることが究極の孝行となる。孝行とは、家にあつて親に仕えることがその始まりで、家を出て主君に仕えるのが中間のもので、立派な人物になり世に認められることがその究極なのだ。

とある。空海は自身の名を残すのはもちろん、先に見たように父親の名を寺の名として今に伝えている。ちなみに母親の名の「玉依御前」は般若湯（僧家でお酒のこと）の名前にもつけられて、その名を今に伝えるのに一役かっている。

『性霊集巻第八』には、空海の両親に対する報恩に懸ける強い真情が書かれている。それによると

わたくしを生み、育ててくれたのは父母の恩の御陰である。その恩は天より高く、大地より厚いものだ。粉骨碎身して、命を失う事があるとも、いつの日か、必ずその恩に報いたい。

とある。空海はその若き日はただひたすら新しい教えを求め、弘法に努めたが、そんな中にあつてもやはり父母に対する恩は忘れることは無かったのだろう。その孝行も一般レベルでは計れないほどの大きいものだったのだ。

空海とは、実はやはり大変な孝行息子だったのだ。